

## 第 10 章 矢野峰人『近代英文学史』

矢野峰人(1893-1988)は本間久雄と共に明治・大正・昭和の三代に渡ったワイルド研究に大きな業績を残し、日本ワイルド協会設立にも大きく貢献した研究である。矢野峰人の初期の代表作が大正 15 年(1926)6 月の『近代英文学史』(第一書房)である。

### (1) 矢野峰人

矢野峰人は本名が矢野禾積である。三高在学中より詩作を発表するなどしていたが、京都帝国大学英文科に進学し、大正 11 年(1922)より 4 年間三高で教鞭を執った後、英国へ留学。その後は台北帝大教授、同志社大学教授、都立大学教授を歴任し、都立大学、東洋大学の学長を歴任した。英文学者としても、比較文学者としてもその活躍の場は広い。

### (2) 『近代英文学史』

大正 15 年(1926)6 月の矢野峰人『近代英文学史』(第一書房)も忘れることができない。昭和 4 年(1929)2 月に改訂版、昭和 18 年(1943)12 月に『近英文芸批評史』(全国書房)。そして、『近代英文学史』を補訂したものが昭和 53 年～54 年(1978～1979)の『世紀末英文学史』(上下、牧神社)へとつながっている。

本書の内容は以下の通りである。

- 序 論 主潮と背景
- 第一章 フルタア・ペイタア
- 第二章 大陸文芸の輸入と紹介
- 第三章 世紀末文壇の瞰望
- 第四章 世紀末英文学の特色
- 第五章 デカダンの意義

第六章	オスカー・ワイルド
第七章	オオブリイ・ピアズリイ
第八章	世紀末の英詩壇
第九章	世紀末の小説界
第十章	エッセイ
第十一章	反動思潮
第十二章	愛蘭文芸復興
終	詞
	参考書目・著作目録

全体のうち、「第五章 デカダンの意義」「第六章 オスカー、ワイルド」については、特にワイルドとの関連がある。また、「第七章 オオブリイ・ピアズリイ」についても触れておくことにする。

### (3) 「第五章 デカダンの意義」

「デカダン」を説明するにはワイルドの *The Picture of Dorian Gray* の第10章を取り上げ、「それは前代未聞の奇書であった」<sup>(1)</sup>を紹介している。この *The Picture of Dorian Gray* の原文を見てみよう。

The style in which it was written was that curious jeweled style, vivid and obscure at once, full of argot and of archaisms, of technical expressions and of elaborate paraphrases, that characterizes the work of some of the finest artists of the French school of *Symbolistes*. There were in it metaphors as monstrous as orchids, and as subtle in colour. The life of the senses was described in the terms of mystical philosophy. One hardly knew at times whether one was reading the spiritual ecstasies of some mediaeval saint or the morbid confessions of a modern sinner. It was a poisonous book. <sup>(2)</sup>

以降、この奇書についての説明が続いている。

文章の聲調、あるいは章句の有する音楽の微妙なる単音は、入念に繰返されたる複雑なる疊句と音律とに満ちてゐるがゆゑに、次から次へと頁を翻すこの若人の脳裡に、一種の幻想、夢みる病を醸し、日の落つるをも、夕影の迫るをも忘れさせたのであつた<sup>(3)</sup>

*The Picture of Dorian Gray*の原文も見ておきたい。

The heavy odour incense seemed to cling about its pages and to trouble the brain. The mere cadence of the sentences, the subtle monotony of their music, so full as it was of complex refrains and movements elaborately repeated, produced in the mind of the lad, as he passed from chapter to chapter, a form of reverie, a malady of dreaming, that made him unconscious of the falling day and creeping shadows.<sup>(4)</sup>

「天下の奇書」と呼ばれたるものがユイスマンスの『さかしま』“A Rebours”なることは、今や天下周知の事實である。<sup>(5)</sup>

また、『さかしま』については矢野は以下のように記している。

『さかしま』の基調をなせるものは、あらゆる生活様式に於ける人工性の讚美であるが、人工性に對するかかる熾烈なる尊重と愛着とは如何にして生じ來つたか？

人工性の讚美とは、自然に對する反逆であり、自然に對する人智の挑戦である。<sup>(6)</sup>

さらに、デカダンの芸術については以下のようにまとめている。

要するに、デカダンの藝術は、アアサア・シモンズのいふやうに古典的でも無く、さりとして、それに對する羅漫的でもなく、また古典的なるものの特徴を、完全なる單純、健全、釣合とすれば、デカダン文学は興味深く美しく新奇ではあるが、たしかに「新らしくして美はしき興味ある病」“a new and beautiful and interesting disease”<sup>(7)</sup>

世紀末の英文学に於て、かかるデカダンの身體を最もよく發揮したものは、薄倖なる畫家ピアズリィの繪畫並に詩文、ワイルドの『ドオリアン・グレイ』並に『サロメ』、シモンズの詩などであつた。<sup>(8)</sup>

矢野は以前にシモンズの詩の翻譯なども手掛けていたことを考えると、世紀末文学のペイター、ワイルドへの言及には周辺理解が伴うものとして注目できる。

#### (4)「第六章 オスカア・ワイルド」

「第六章 オスカア・ワイルド」については以下の文章から始まっている。

ワイルドが Reading 獄舎から放たれて「佛蘭西に帰つた時」親友 André Gide に向つて語つた言葉の中に、「世間といふものは實に恐ろしいもので、最後の行為によつてのみ其人を憶えて居る」とあるが、まことに槿花一朝の榮、夢よりも儂く、一度囚はれの身となるや、彼を知れると識らざるとに論無く、世人は口を極めてこの一代の驕兒が非行背徳を鳴らし立てた。<sup>(9)</sup>

中頃ではペイターの New Hedonism について触れ、最後は以下の文でまとめ

られている。

實に、彼は「生の充實」を冀ひ、一切を知らうと努めながら、實は生の一局部に偏し、官能的快樂を追うて低徊彷徨してゐたのであつた。それは即ち彼が、人生の半面を成し、人生に對しえ最も重要な意義を有てる苦難と悲哀とを回避し閑却して居た事であつた。故に彼が人生の眞の姿を觀察する事を得、その価値、その味はひをはじめてしみじみと感ずる事を得初めたのは、獄中に於てであつたと言へる。この意味に於て彼の入獄は、彼が新生活に入るための洗禮だつたのである。<sup>(10)</sup>

### (5) 「第七章 オオブライ・ピアズリイ」

「第七章 オオブライ・ピアズリイ」ではワイルドとの関連で、挿絵について触れている。

九十四年にはワイルドの『サロメ』は怪異奇抜の挿畫を描いてその内容と共に大評判を惹起したが、それにもしてピアズリイの名を一般的ならしめたものは、この年四月ジョン・レインから出た『イエロオ・ブック』の表紙意匠並にそれに挿んだ数葉の彼一流の繪畫であつた。<sup>(11)</sup>

全体的には、ピアズリイの不遇の生涯が紹介されていることは言うまでもないことだ。

### (6) その他

矢野峰人は、世紀末文学の芸術家に焦点を当てながら、数多くの業績を輩出している。大正後半に多くの業績があるので一部であるが、紹介しておきたい。

大正 10 年(1921)12 月 『シモンズ選集』(アルス泰西名詩選)(第 4 編)

アルス

大正 11 年(1922) T.Kuriyagawa and K.Yano. *The Later Nineteenth Century Poets.* Sekizen-kwan.

大正 11 年(1922)10 月 「詩界行脚—オスカ・ワイルド」(『詩聖』第 13 号)

大正 13 年(1924) *Modern Critical Essays.* Sekizen-kwan.

大正 14 年(1925) 9 月 「ワイルドの一面観」(『饗宴』第 1 輯第 1 冊)

大正 14 年(1925) 11 月 「世紀末の詩人アアネスト・ダウスン」(『早稲田文学』第 238 号)

大正 15 年(1926) 6 月 『詩学雑考』第一書房

矢野の活躍は戦前だけでなく、さらには戦後には昭和 53 年～昭和 54 年(1978～1979)の『世紀末文学史』(上下、牧神社)の大著へと繋がるのである。矢野の研究を見ていくと、本間久雄の研究方法に似ているところがある。本間がワイルドだけでなく、その周辺人物であるモリス、あるいは同時代人に活躍したエレン・ケイ、トルストイなどの研究をし、芸術論という点ではシェイクスピアにも取り組んでいる。一見してバラバラに研究しているように見えるのだが、複数の芸術家を研究することにより、その比較等を通してその内容が鮮明になっているのである。矢野の研究もこれに似たところがある。本間は英文学を強く意識しながら『明治文学史』を著したように、矢野は英文学を意識しながら、日本の詩人、特に蒲原有明に注目した。

矢野の大正時代の業績は矢野にとっては発展途上であるが、日本における世紀末文学研究を考える時、その果たした役割は大きい。

## 参考資料

佐々木隆「大正時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』武蔵野短期大学、2001 年 6 月)

注

- (1) 矢野峰人『近代英文学史』（第一書房、1926年6月）、p.141.
- (2) *Collins Complete Works of Oscar Wilde* (Centenary edition)(Glasgow, HarperCollins Publishers, 1999), 96.
- (3) 矢野峰人『近代英文学史』、p.142.
- (4) *Collins Complete Works of Oscar Wilde*, p.96.
- (5) 矢野峰人『近代英文学史』、 p.143.
- (6) *Ibid.*, p.172.
- (7) *Ibid.*, pp.179-180.
- (8) *Ibid.*, p.180.
- (9) *Ibid.*, p.181
- (10) *Ibid.*, pp.193-194
- (11) *Ibid.*, p.198